

福井県三国町旧市街地の町家と町並みに関する調査  
研究-上新町における町家の正面意匠について-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2010-10-20 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤田, 勝也, 中村, 環, 岩瀬, 純平, 高井, 翼, FUJITA, Masaya, NAKAMURA, Tamaki, IWASE, Junpei, TAKAI, Tsubasa メールアドレス: 所属:
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10098/2550">http://hdl.handle.net/10098/2550</a>

# 福井県三国町旧市街地の町家と町並みに関する調査研究 － 上新町における町家の正面意匠について －

A Case Study on the Town Houses and Townscape of the Historical Urban Areas in Mikuni Town  
－ During the front design of the town houses (machiya) at the Uwashin-machi －

藤田 勝也\*  
(福井大学工学部建築建設工学科)  
中村 環\*\*  
(くみあい建設)  
岩瀬 純平\*\*\*  
(福井大学大学院工学研究科)  
高井 翼\*\*\*  
(福井大学大学院工学研究科)

## 1 はじめに

本研究の目的は、福井県三国町旧市街地のうち上新町<sup>1)</sup>における伝統的な町家建築の正面意匠について、その特徴を概観することにある。筆者等は2002年9～10月の期間、旧市街地の町並み景観調査<sup>2)</sup>を実施し、そこで明らかになった町並み景観の現状に関する調査結果の概要の報告と分析を行った<sup>3)</sup>。本稿は上記調査の一環として旧市街地全域にわたって実施した、伝統的な町家の正面意匠に関する現況調査の概要報告であり、とくに上新町に絞って考察を加えるものである。

現在、三国町では歴史的景観を生かした景観整備が旧市街地を中心に進行中であるが、家屋の修理・修景に際して具体的に問題となるのは、景観上重要な位置を占める伝統的な町家のとくに正面意匠の扱いである。伝統的な町家もまた景観の一部であって、景観整備はそのあり方のみ限定されるものではもとよりない。とはいえ、町家のとくに正面意匠は歴史的な地域の景観整備を進めるにあたって、その枢要となるというのも紛れもない事実である。ここでは上新町の地域性ならびに、1980年に行われた調査<sup>4)</sup>との比較にもとづく、ここ約20年間における町並み変容の実態を踏まえたうえで、町家の正面意匠上の特徴を見出すことによって、景観整備の基礎資料の一端として役立てたい。

## 2 上新町の概要<sup>5)</sup>

旧市街地のうち、下町が九頭竜川(川上側は竹田川)に平行する下町通り沿いに、中世以来の由緒をもって発展したのに対し、上新町はその後背台地上、下町通りにはほぼ平行して走る上八町通り沿いに展開する。上新町は万治2年(1659)、標高約6メートルの台地上に、下町とは別に開発された新市街地であって、寺社を取り込みつつ整然とした町割りを形成する。回船問屋、材木商など大商人が屋敷・蔵を構える川沿いの下町に対し、上新町は日常生活用品を扱う小売商人、湊の日常生活を支える大工、桶、指物職人など、商工業者の居住区であった。また当時の町場の最外縁部に位置する、現在

(キーワード：正面意匠、三国町、上新町、町家、町並み、旧市街地)

---

\* Masaya FUJITA, Department of Architecture and Civil Engineering, Fukui University

\*\* Tamaki NAKAMURA, Kumiai Kensetsu co., ltd

\*\*\* Junpei IWASE, Graduate School of Engineering, Fukui University

\*\*\* Tsubasa TAKAI, Graduate School of Engineering, Fukui University

のえちぜん鉄道三国駅前、氷川神社周辺は、遊女屋、芝居小屋が集まる遊興の地として機能した。江戸時代の三国湊は、度々火災に見舞われる。上新町では文政6年(1823)、400棟近くが焼失するという大火があって、町はほぼ全焼に近い状況と推察されている。その後個々の建替え・改築も少なくないとはいえ、全体に調和のとれた景観が今なお上新町にみられるのは、この大火を契機とする再建・整備によるところが大きい。



図1 上新町の町割

『三国鑑』(元治元年(1864)成立)<sup>6)</sup>によれば、下町と同様上新町もまた、表町と裏町からなっていた。上新町では前者は7町、後者は4町という。表町は平野町、久宝持町、上薬師町、下薬師町、清円寺町、喜円町、平野口町の都合7町であり、裏町4町の具体名は不明だが、沢出町、今出町、唯称寺垣内、勝授寺門町にここでは推定する(図1)。

### 3 町家の正面意匠の特徴

#### 3.1 旧市街地全体からみた特徴

三国町旧市街地には計2,935棟の建物が現存し、そのうち615棟が上新町に所在する。また町家は全体で計329棟あって、上新町には72棟が存在する(表1参照)。つまり本稿で対象となるのは、上新町において約1割を占める都合72棟の町家ということである。

表1 各地域の町家型住宅の総棟数

地域名	上新町	下町	滝谷	その他	計
棟数	72	120	133	4	329

まず本節では、それらの正面意匠について旧市街地全体からみた特徴を、一階窓形式、二階窓形式、二階軒下、二階意匠、小屋根の形式と意匠、その他の意匠、に分けて検討する。

##### 3.1.1 一階窓形式(図1~2)

各地域とも出格子がもっとも多く、上新町も例外ではない。上新町では鉄格子を備える町家が1棟あって、これは他の地域にみられない。また木製の引違い戸も多く残っており、その割合(各地域の棟数を分母とした割合、以下同様)はもっとも高い。

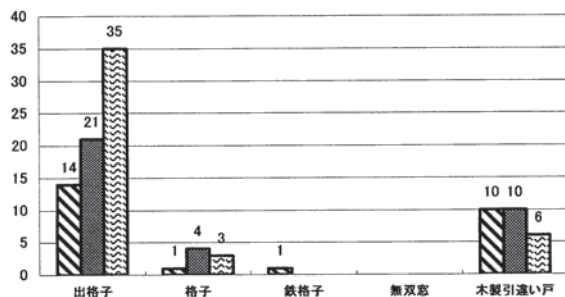


図1 一階窓形式(棟数)

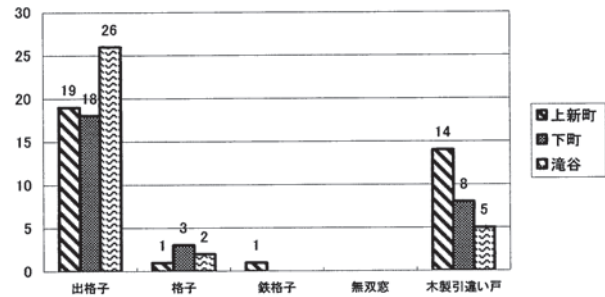


図2 一階窓形式(%)

### 3.1.2 二階窓形式 (図3~4)

各地域とも木製引違い戸が最多だが、その割合は上新町がもっとも高い。これは一階窓形式と同様の傾向である。また出格子、格子、無双窓の各種形式がみえる中で、鉄格子は存在しないところが、一階窓形式とは対照的である。

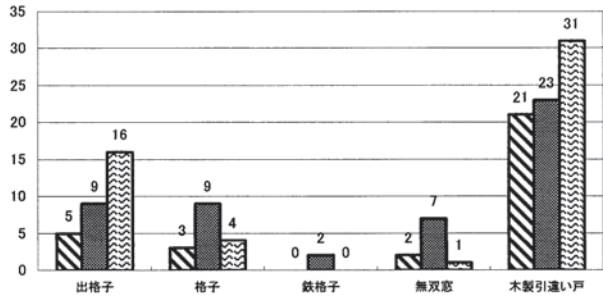


図3 二階窓形式 (棟数)

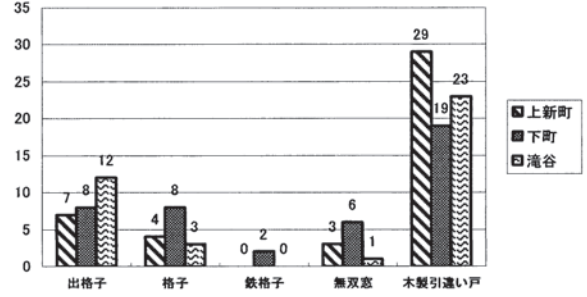


図4 二階窓形式 (%)

### 3.1.3 二階軒下 (図5~6)

腕木、登り梁、せがい天井、化粧垂木、腕木絵様線形といった手法・細部が各地域で確認できる。上新町が他地域に比べてもっとも高い割合を示すのは腕木とせがい天井である。とりわけせがい天井は約7割ときわめて高率である。

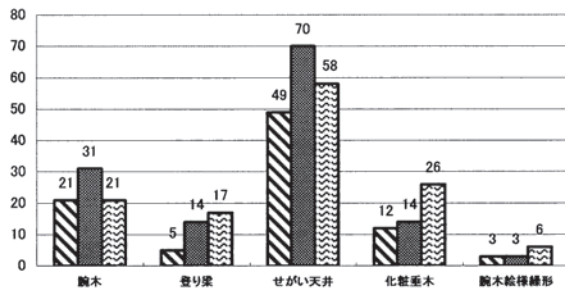


図5 二階軒下 (棟数)

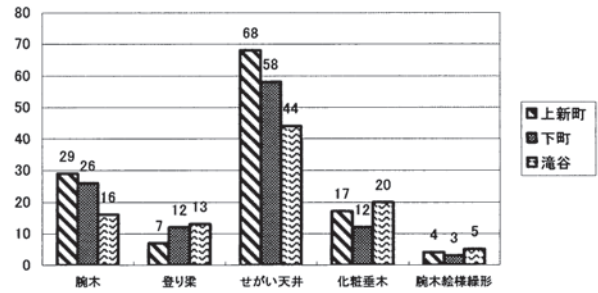


図6 二階軒下 (%)

### 3.1.4 二階意匠 (図7~8)

袖壁ならびに、袖壁下の腕木に絵様線形が付くもの、あるいは持ち送り絵様線形、その変形、といった多様な意匠が各地域に共通してみられる。袖壁はどの地域でも多く確認できるが、その割合は上新町がもっとも高率である。

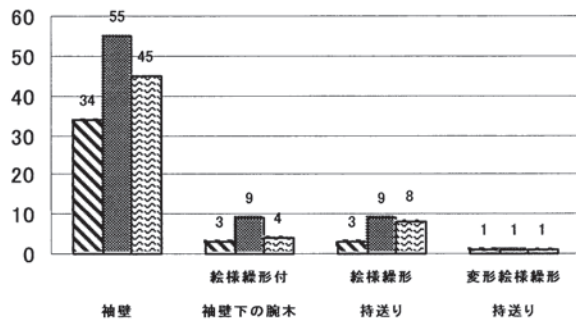


図7 二階意匠 (棟数)

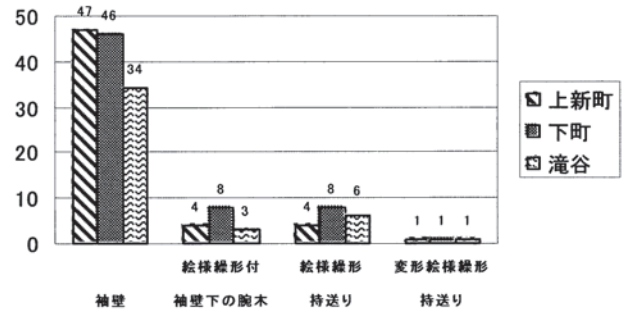


図8 二階意匠 (%)

### 3.1.5 小屋根の形式と意匠

小屋根の形式として、むくり（写真1）、化粧垂木、幕板、腕木、せがい天井、厚板（写真2）、雪止め木（写真2）といった部材や手法が挙げられる。またとくに細部の意匠として注目されるのは、破風板ならびに破風留め<sup>7)</sup>（写真3）、あるいは木鼻といった部材の有無やその意匠である。破風板は絵様線形の有無で二種に分け、また破風留めは絵様線形や線形の有無で三種に分けて検討する。

まず小屋根の形式（図9～10）では、各地域とも化粧垂木がもっとも多く、ついでむくりや幕板という順である。上新町も他地域と同様の傾向を示すが、化粧垂木の割合はもっとも高率である。対してせがい天井の割合はもっとも低い。

また小屋根の意匠（図11～12）では、各地域とも破風板に絵様線形を施すものが他を圧倒して多く、上新町も例外ではない。ただし破風留めにおいて、絵様線形のある事例と線形のみで絵様を持たない事例が拮抗するのが、他の地域とは異なる特徴である。



写真1



写真2



破風留め 破風板 写真3

雪止め木

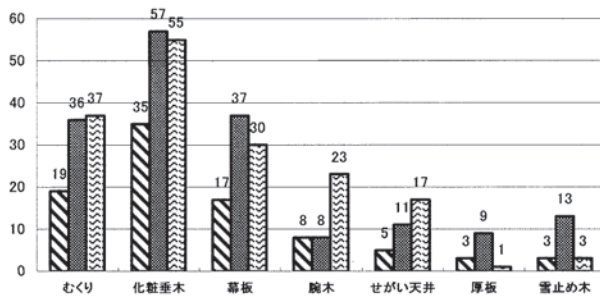


図9 小屋根の形式 (棟数)

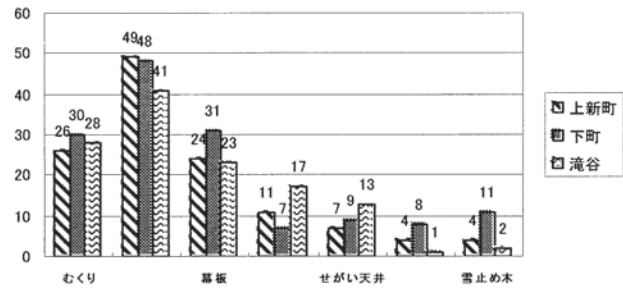


図10 小屋根の形式 (%)

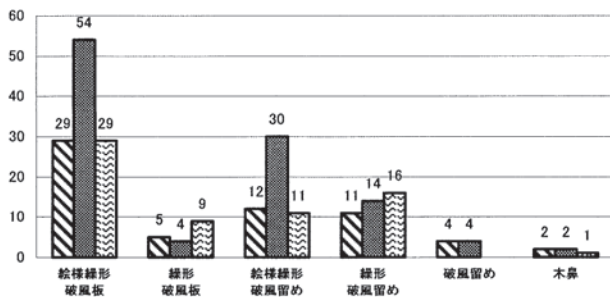


図11 小屋根の意匠 (棟数)

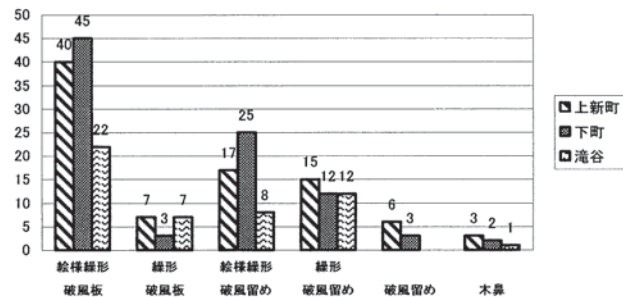


図12 小屋根の意匠 (%)

3.1.6 その他の意匠 (図13~14)

その他の意匠として注目されるのは、敷石の笏谷石および、地覆石の繰形 (写真4) であって、地覆石もまた笏谷石製である。当地ではこの地覆石をもって「もっそ石」とも呼んでいる<sup>8)</sup>。上新町はいずれも下町ほど高率ではないものの、前者は15棟、後者は10棟の町家に確認できる。

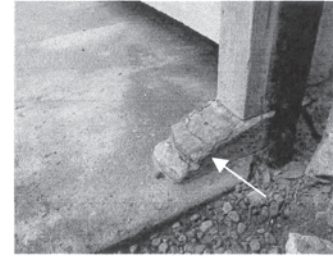


写真4

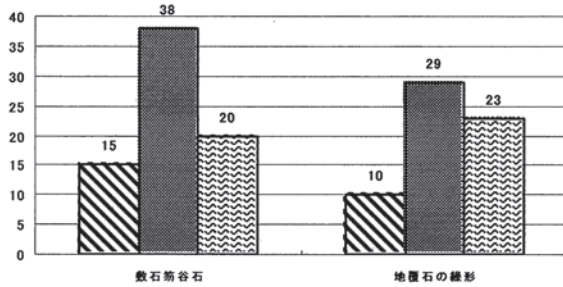


図13 その他の意匠 (棟数)

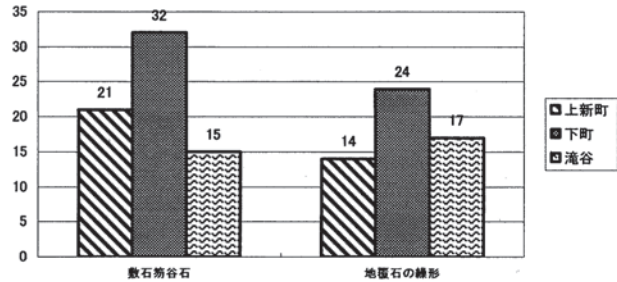


図14 その他の意匠 (%)

3.2 上新町内の各町における特徴

各町の町家棟数は表2の通りである。

表2 上新町における各町別町家の棟数

町名	久宝持	上薬師	下薬師	清円寺	平野	平野口	喜宝	沢出	今出	唯称寺垣内	勝授寺門前	計
棟数	6	11	7	9	13	11	11	2	0	1	1	72

(久宝持町~喜宝町は表町、沢出町~勝授寺門前町は裏町)

前節と同様に、正面意匠について各町の特徴を、一階窓形式、二階窓形式、二階軒下、二階意匠、小屋根の形式と意匠、その他の意匠、に分けて検討する。

3.2.1 一階窓形式 (図15~16)

格子は唯一平野町に、鉄格子は久宝持町にある。出格子は上薬師町に高率で、木製引き違い戸は下薬師町および平野口町 (以下、棟数の少ない裏町について%は図示しない) に高率である。以上の表町とは対照的に、裏町の各町には一階窓形式を特徴づける要素はみられない。

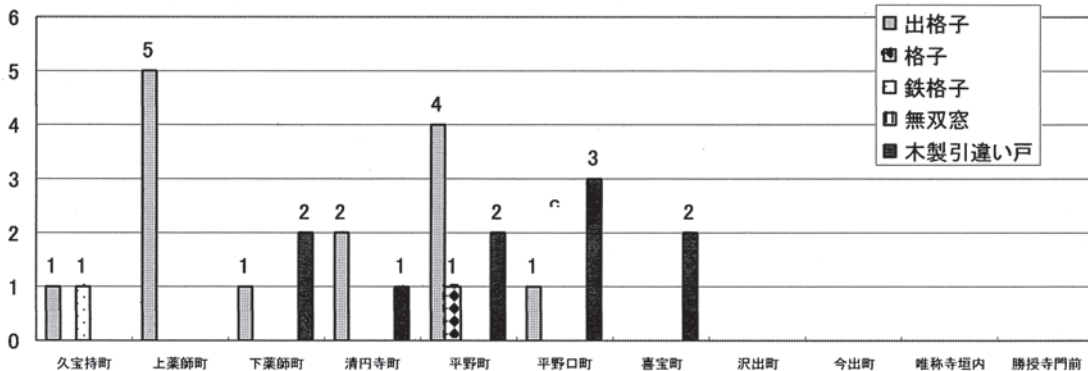


図15 一階窓形式 (棟数)

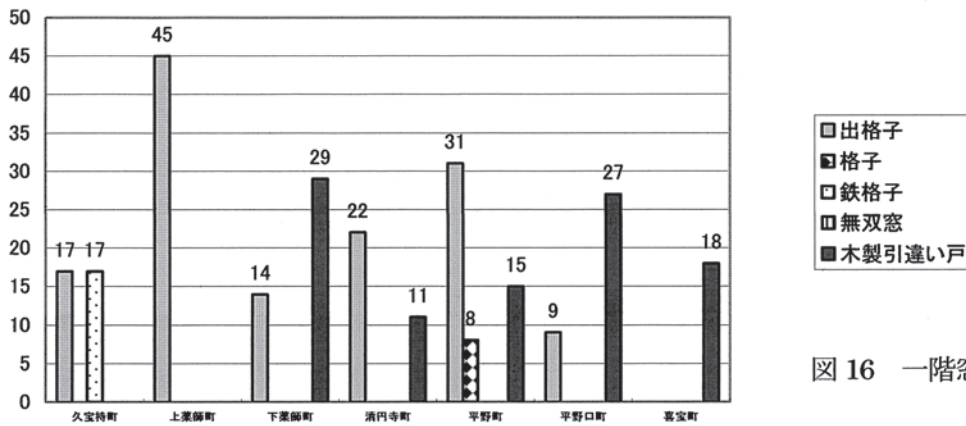


図 16 一階窓形式 (%)

### 3.2.2 二階窓形式 (図 17~18)

木製引違い戸は、各町に広く分布しているが、とりわけ上薬師町・平野口町・喜宝町に高率である。

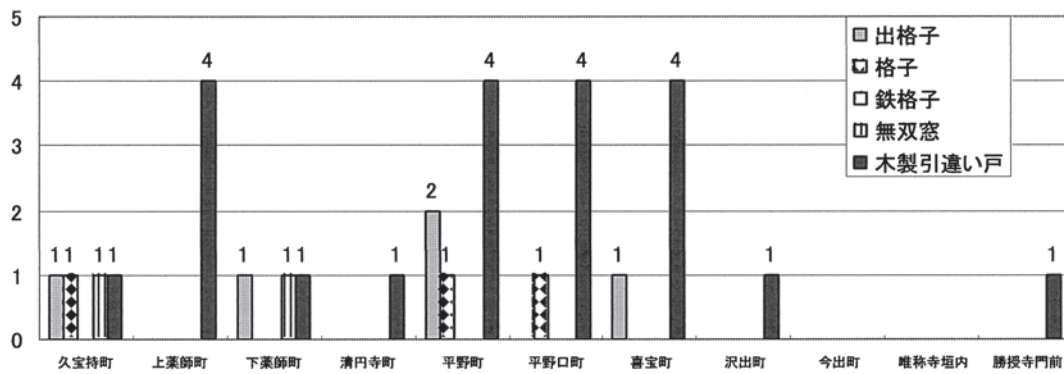


図 17 二階窓形式 (棟数)

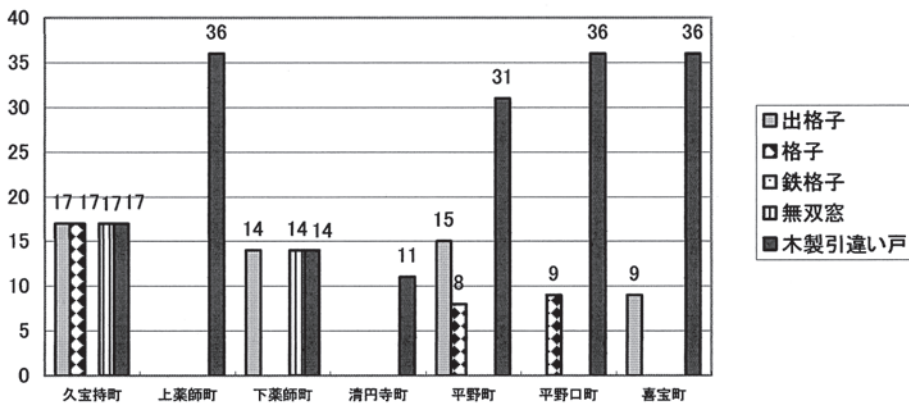


図 18 二階窓形式 (%)

### 3.2.3 二階軒下 (図 19~20)

せがい天井は各町ともよく残る。腕木はそれについていて、各町に均一に分布している。また登り梁は平野町が3棟と多く、化粧垂木は平野口町の5棟、平野町の3棟とつづく。

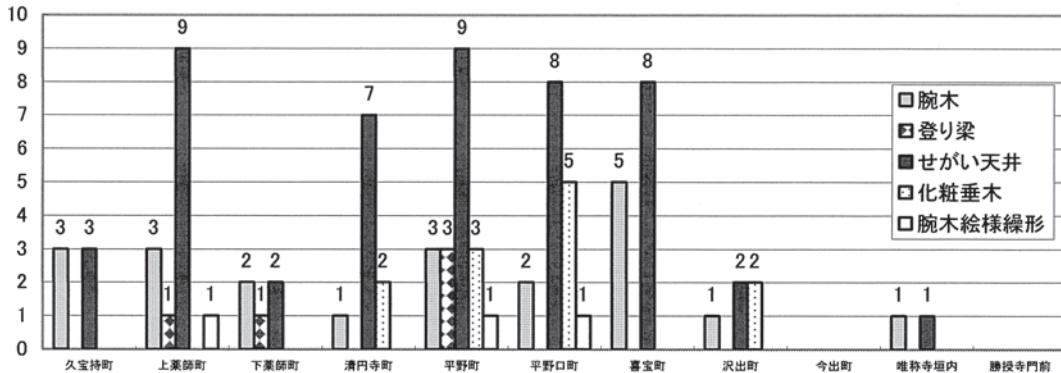


図 19 二階軒下 (棟数)

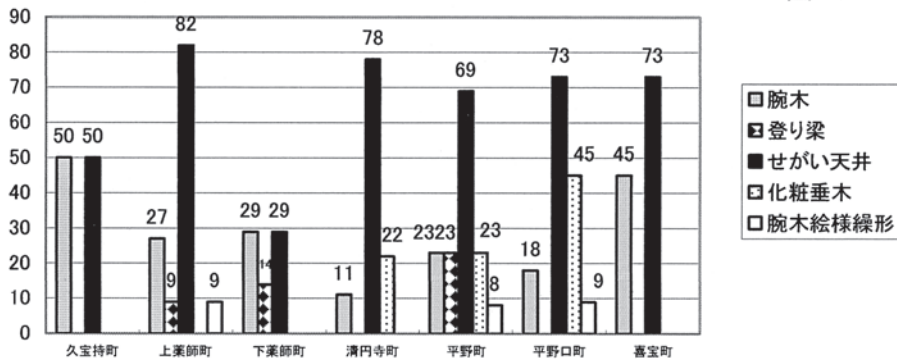


図 20 二階軒下 (%)

### 3.2.4 二階意匠 (図 21~22)

袖壁は表町の各町に共通してみられる。とりわけ清円寺町・平野口町は高率である。袖壁下の腕木に絵様線形をもつのは上薬師町と清円寺町のみであり、持ち送りに絵様線形をもつのは清円寺町・平野町・喜宝町、そして持ち送りに変形絵様線形をもつのは喜宝町のみである。

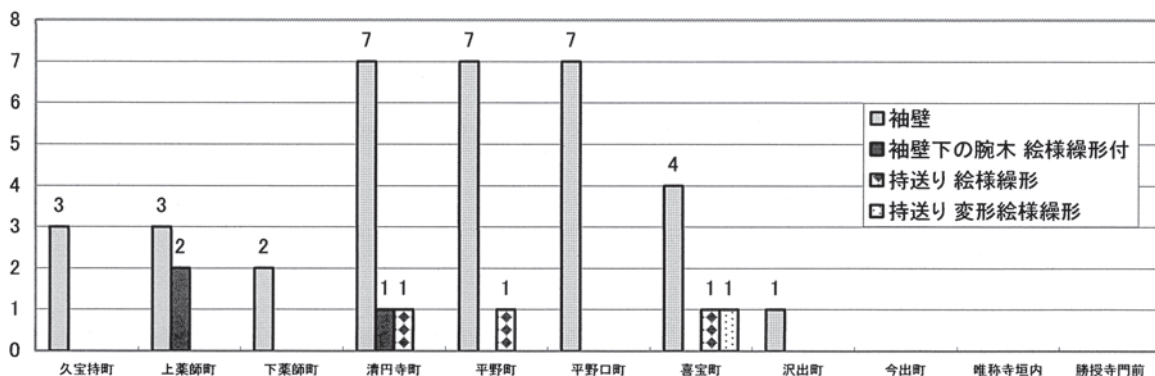


図 21 二階意匠 (棟数)



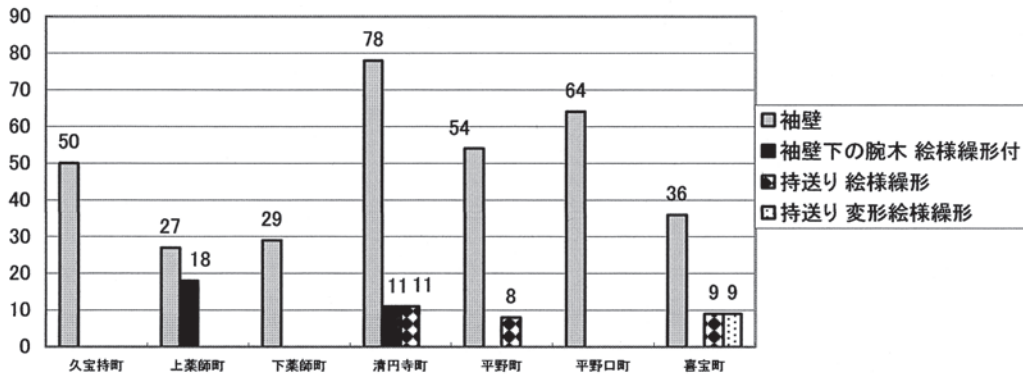


図 22 二階意匠 (%)

### 3.2.5 小屋根の形式と意匠

小屋根の形式 (図 23~24) では、むくりは下薬師町を除く表町で広くみられ、とくに割合が高いのは平野町である。幕板や腕木も表町にみえ、幕板は平野町に、腕木は清円寺町にやや多い。化粧垂木は表町の各町に広く分布していて、清円寺町・平野口町に多い。

小屋根の意匠 (図 25~26) では、破風板に絵様線形をもつ事例は表町に広くかつ多く分布するが、下薬師町に不在である。破風留めでは絵様線形あるいは線形のみもつ事例が多く、前者はとくに平野町にみられる。木鼻は下薬師町と喜宝町に1例ずつ存する。

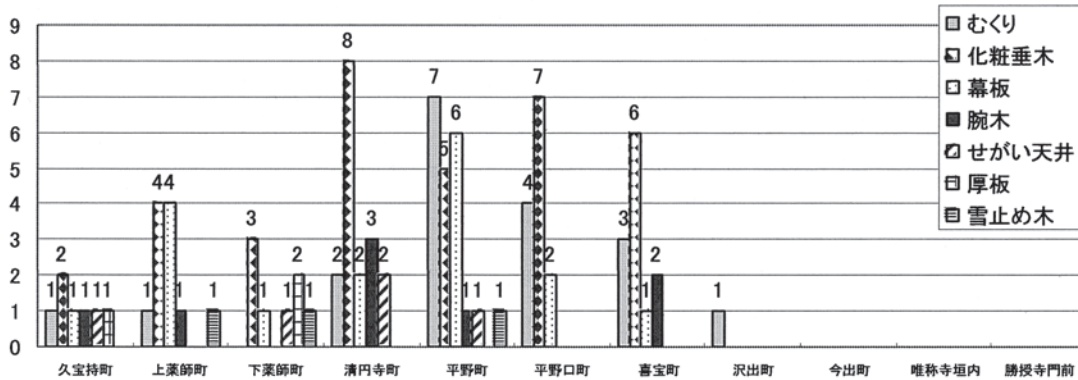


図 23 小屋根の形式 (棟数)

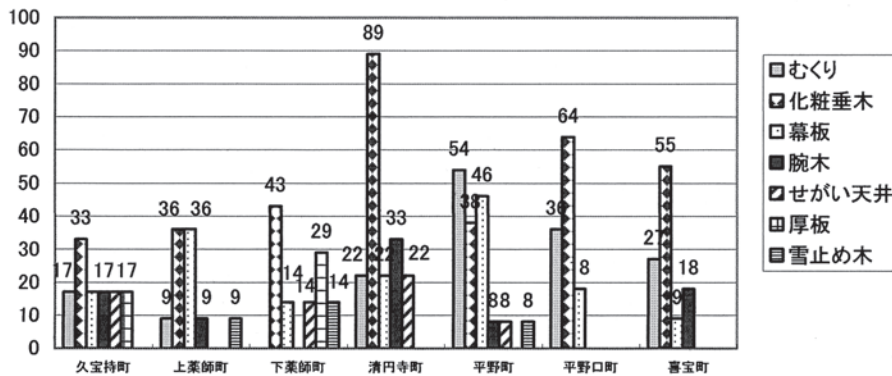


図 24 小屋根の形式 (%)

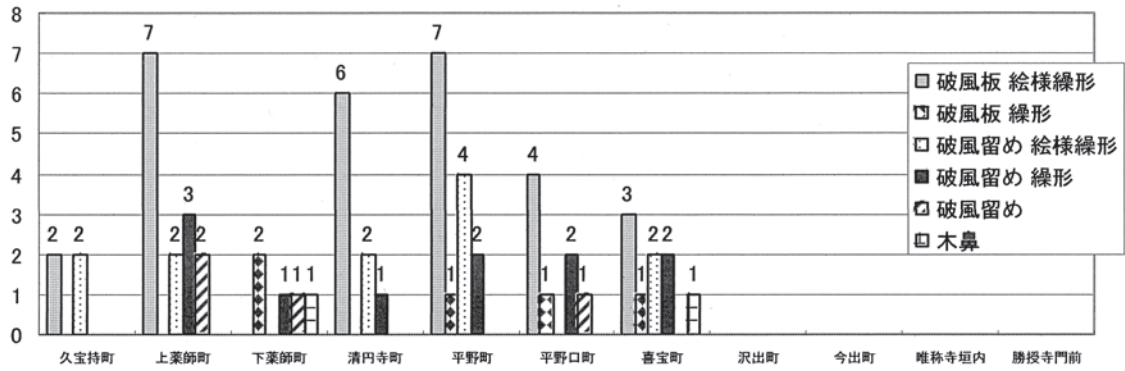


図 25 小屋根の意匠 (棟数)

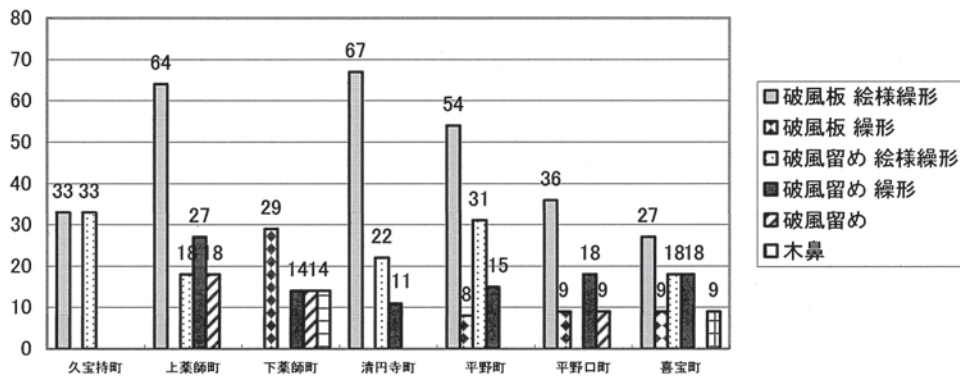


図 26 小屋根の意匠 (%)

3.2.6 その他の意匠 (図 27~28)

敷石の笏谷石、地覆石の線形とも、上・下薬師町、清円寺町の辺りによく残っていることがわかる。

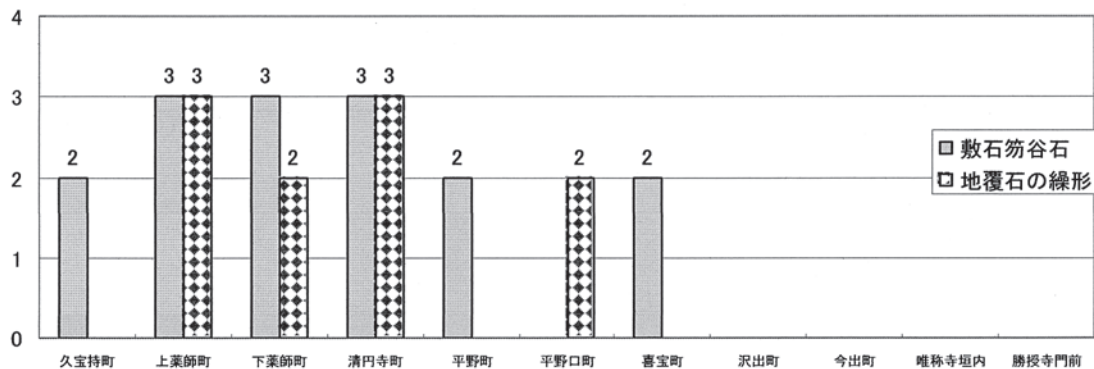


図 27 その他の意匠 (棟数)

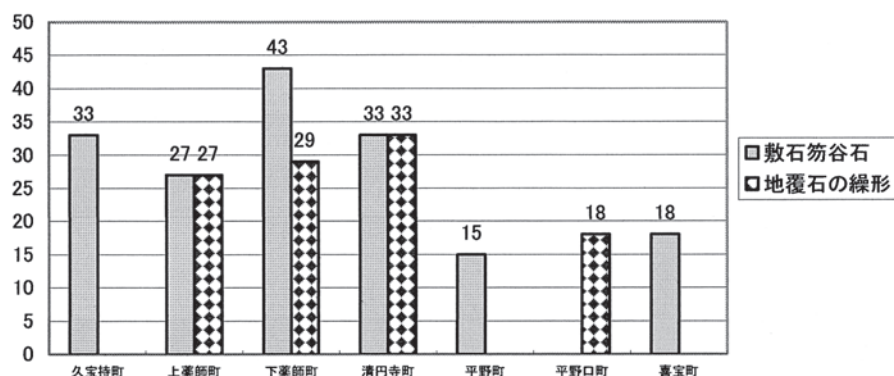


図 28 その他の意匠 (%)

### 3.3 表町と裏町の比較

上新町における町家の棟数 72 棟の内訳は表町 68 棟、裏町 4 棟であって、裏町に町家は希少である。そのため両者の正面意匠の比較は事実上困難だが、強いて相違を指摘するならば、二階窓形式に関して多様な表町に対し裏町は木製引違い戸のみである、二階軒下は両町ともせがい天井が多い、二階意匠では表町にみられる袖壁は裏町には 1 棟のみである、小屋根の形式や意匠、その他の意匠についても裏町は不在である、といった点が挙げられる。要するに、表町に比べて裏町には伝統的な町家は少なく、また正面意匠に際だった特徴を見出すことはできない、ということである。

## 4 おわりに

以上に検討した、伝統的町家の正面意匠に関する上新町の特徴をまとめる。

- 1, 一・二階とも木製引違い戸の割合が他地域に比べて高い。
- 2, 二階軒下のせがい天井、また二階の袖壁がもっとも高率である。
- 3, 上記 2 とは対照的に小屋根にせがい天井は少なく、化粧垂木を多用する。
- 4, 笏谷石を用いた敷石や地覆石の繰形も他地域と同様にみられる。
- 5, 町内ではおもに上・下薬師町、清円寺町、平野町、平野口町そして喜宝町に意匠上の特徴が顕著である。
- 6, 以上いずれも表町の町家に関する事柄であって、裏町に町家は希少であり、際だった特徴は見出し難い。

歴史的な町場では、町家の正面意匠こそ地域の歴史性をもっともよくあらわす要素の一つであり、したがって景観整備の前提は、その特徴を正確に把握したうえで方向性を冷静かつ客観的に模索することにある、はずである。にもかかわらず、かかる論点を踏まえ、実態の把握と検討が十分に行われないままに、たとえば設計者や関係者だけの個人的イメージや嗜好、あるいは恣意的、場当たりの判断によって、一見「伝統的様式」らしく不用意に「修理・修景」されるという陥穽が一方で存することもまた、事実である。歴史的意匠を隠れ蓑に好き勝手にデザインされた、いわゆる「伝統的様式」の建築は個人あるいは一部の人の欲望の産物に過ぎない。それが地域住民さらには外来者の目を欺くというのは地域にとって何より悲劇であろう。ここでの伝統的町家は映画のセットやレジャーランドの風景なのでは決してない。とくにその正面意匠は地域の内外ともに他への影響力がきわめて大きく、求められているのは地域性や歴史性を真摯に把握する姿勢と、その結果を素直に反映する意匠である。今なお伝統的な佇まいをみせる三国町旧市街地が上記の如き悪しき事態に陥らないことを願ってやまない。本報告がそのためのささやかな一助になれば幸いである。

付記：現地調査ならびに調査結果の整理作業では地元住民の方々をはじめ、三国町役場企画情報課課長千利濱喜良氏、(株)サンワコン市街地計画部宮川直子氏に大変お世話になった。あらためて末尾ながらここに謝意を表したい。なお本稿は、前稿に引き続き、著者等を中心とする上新町の現地調査をもとにした中村環「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する研究——上新町を中心に——」(平成14年度卒業論文 福井大学工学部建築建設工学科 2003年2月)の内容の一部を発展させたものである。

#### 註

- 1) 三国町旧市街地が下町・上新町・滝谷の3地域に大きく分けられることは、藤田等註3後掲論文ほか。
- 2) 福井大学藤田研究室(建築史研究室)が行った現地調査。この調査は、藤田と(株)サンワコンとの共同研究「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する調査・研究」(平成14年度)の一環であり、また三国町による「街並み環境整備事業」のための現況調査の一部をなす。特に伝統的な町家型住宅については正面意匠も詳細に調査し、間口・軒高の測定や写真撮影もあわせて行った。なお「町家」の概念は必ずしも厳密に定義されていないが、本調査では「町家型住宅」を「隣接する家と軒を接しており、建物前面の道路から後退していない建物」とした。
- 3) 上新町の景観の概要については、藤田勝也・中村環・岩瀬純平・高井翼(2003)「福井県三国町旧市街地の町家と町並みに関する調査研究—上新町の景観の概要—」『日本海地域の自然と環境』第10号に報告し、また滝谷・下町の地域については、岩瀬純平・藤田勝也・高井翼(2003)「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する研究—滝谷を中心に—」『福井大学工学部研究報告』第51巻第2号および、高井翼・藤田勝也・岩瀬純平(2003)「福井県三国町旧市街地の町並み景観に関する研究—下町を中心に—」『福井大学工学部研究報告』第51巻第2号に各々報告した。本稿はとくに上新町に関する前者の続編としても位置づけられる。
- 4) 玉井哲雄氏等による三国町の民家と町並みに関する調査。三国町教育委員会編(1983)『三国町の民家と町並み——三国町民家調査・町並み調査報告書』三国町に詳しい。
- 5) 三国町史編纂委員会編(1964)『三国町史』三国町、三国町百年史編纂委員会編(1989)『三国町百年史』三国町などを参照。
- 6) 三国町史編纂委員会編(1973)『三国町史 町内記録』三国町、所収。
- 7) 小屋根両端の破風の主屋側先端を受ける部材を、当地では「破風留め」と称する。破風留めには線形、さらには絵様を施すのが一般的で、装飾性がきわめて高く、現在でも修理・改築・新築時に装置される意匠の一つである。以上、長谷川雄幸氏(福井県建築組合連合会)の御教示による。
- 8) 註7前掲の長谷川氏の御教示による。